

児玉町遺跡調査会報告書 第8集

共和小学校校庭遺跡

－ C地点の調査－

埼玉県児玉郡児玉町遺跡調査会

児玉町遺跡調査会報告書 第8集

きょう わ しょう がっ こう こう てい い せき
共和小学校校庭遺跡

シイ ち てん ちょう さ
— C地点の調査 —

2000

埼玉県児玉郡児玉町遺跡調査会

序

児玉町は豊かな自然環境に恵まれ、人々の生活の場として古来から今日に至るまで連続と利用され続けてきました。現在町には300箇所を超える埋蔵文化財包蔵地が所在し、その「歴史」の重みを感じさせます。

しかしながらより豊かな生活環境の獲得や町の発展といった側面から町の景観は年々と変化を重ねております。このような開発との狭間で、児玉町民はもとより国民共有の財産である埋蔵文化財を来るべき21世紀を見据えいかに守り伝えてゆくかが重大な課題でありかつ責務と考えております。

生涯学習の時代といわれる今日、平成11年度の社会教育振興重点目標を「町民の期待に応える生涯学習条件の整備充実」と定め、その一項目を「文化財の保護と活用」とし、鋭意努力を重ねているところであります。

本書の刊行が先人たちの営為の証である遺跡、あるいは当時の生活で使用された様々な遺物から、今にある“自分”のみならず“児玉町”という地域を見つめ直す一助となれば幸甚に存じます。

末筆となりましたが発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで埼玉県警察本部施設課ならびに関係諸機関の多くの皆様にご協力を賜り厚く御礼申し上げる次第であります。

平成12年3月1日

児玉町教育委員会教育長

児玉町遺跡調査会長 富 丘 文 雄

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字蛭川字耕地915番地の6に所在する共和小学校校庭遺跡（No.54-021）C地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、埼玉県警察本部施設課による児玉警察署共和駐在所改築事業に伴う事前の記録保存を目的として埼玉県警察本部施設課より依頼をうけて児玉町遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査の期間は、平成10年11月25日から12月7日まで実施し、報告書刊行のための整理作業は、平成12年2月1日から2月29日まで行った。
4. 発掘調査の担当は大熊季広があたった。本書の編集は整理参加者の協力を得て大熊季広があたり、各執筆分担については各文末に記した。
5. 発掘調査および本書作成にあたって下記の方々のご御助言・御協力を賜った。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）
石坂圭介、岡 稔、小宮山克己、佐藤雅一、白崎智隆、新開基史、塚田泰司、永井智教、中平 薫、猪股麻紀、橋本充史、東野豊秋、埼玉県教育局文化財保護課、児玉郡市文化財担当者会、東海大学考古学研究会
6. 本書作成の主な分担作業は、次のとおりである。
遺構図面操作他（福島礼子、倉林常子）
土器接合・復元（根岸富士江、飯島満江）
遺 物 実 測（櫻井和哉）
ト レ ー ス（福島礼子、倉林常子）
遺 物 写 真（大熊季広）
そ の 他（田口照代）

凡 例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図および観察表等の指示は以下のとおりである。

1. 遺構番号は隣接同遺跡である共和小学校校庭遺跡A・B地点との統一をはかるためB地点からの通番とした。
2. 遺跡、全測図等におけるX・Y数値は平面直角座標第IX系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、矢印の方向はすべて座標北を指す。
3. 測量、実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺 構 1／60
遺 物 土 器 1／4 その他 2／3
4. 測量、実測図内の網部等の指示は以下のとおりである。
…ローム地山 …炉址および焼土 …攪乱
…粘土 …礫石等 …土器黒色処理
5. 遺物図版中の番号は写真図版中の番号に対応している。

児玉町遺跡調査会組織

平成10年度（発掘調査）

会 長	富丘 文雄	児玉町教育委員会教育長
	田島 三郎	文化財保護審議委員長
理 事	清水 守男	文化財保護審議委員
	野口 敏夫	"
	吉川 音繪	"
	坂本 道雄	総務課長
	井上 隆雄	産業課長
	立花 勲	土地改良課長
	大塚 勲	土木課長
	木村 和夫	都市計画課長
	関根 安男	社会教育課長
監 事	小島 和子	文化財保護審議委員
	井上 英夫	企画財政課長
幹 事	鈴木 徳雄	社会教育課文化財係長
	倉林美恵子	" 社会教育主任
	杉山 茂俊	" 文化財係兼務主任
	恋河内章彦	" 主任
	徳山 寿樹	" 主事
	松澤 浩一	" 主事補
	大熊 季広	" 主事
担 当 者		
	調査員補	尾内 俊彦

平成11年度（整理・報告）

会 長	富丘 文雄	児玉町教育委員会教育長
	田島 三郎	文化財保護審議委員長
理 事	清水 守男	文化財保護審議委員
	小島 和子	"
	吉川 音繪	"
	長谷川典明	"
	大塚 勲	総務課長
	中林 重	総合政策課長
	井上 隆雄	農林商工課長
	出牛 博	土木課長
	立花 勲	都市計画課長
	前川 由雄	社会教育課長
幹 事	三上 元一	" 補佐兼係長
	鈴木 徳雄	" 文化財係長
	萩原千恵子	" 社会教育係主任
	恋河内章彦	" 文化財係主任
	徳山 寿樹	" 主事
	松澤 浩一	" 主事補
	大熊 季広	" 主事
担 当 者		
	調査員補	尾内 俊彦

目 次

序

例言・凡例

児玉町遺跡調査会組織

目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯 1

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境 3

1. 地理的環境 3

2. 歴史的環境 5

第Ⅲ章 共和小学校校庭遺跡C地点の概要 7

1. 遺跡の概要 7

2. 基本土層 8

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物 9

1. 竪穴住居址 9

2. 出土状態と遺物観察 13

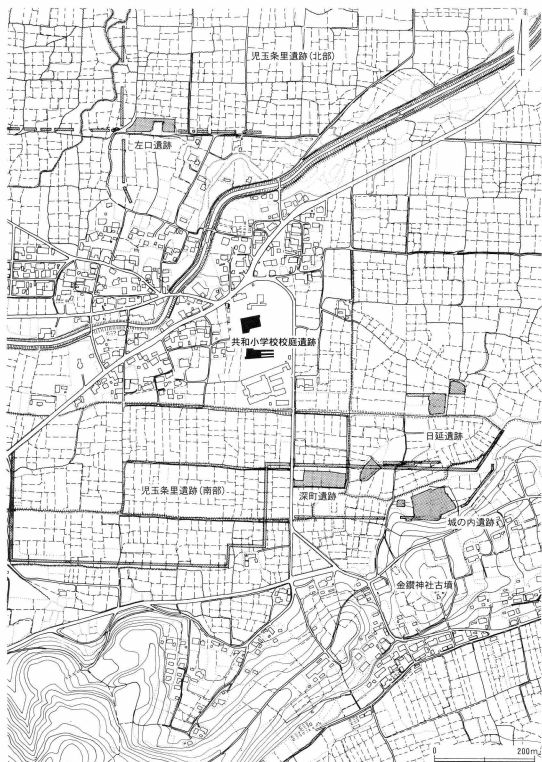
3. 土 壙 16

第Ⅴ章 出土炭化材樹種同定 17

第Ⅵ章 ま と め 19

参 考 文 献

写 真 図 版



第1図 共和小学校校庭遺跡位置図

「児玉町役場 昭和44年測量」
1/25,000を再トレース

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

平成10年11月4日付けの教文第957号で、埼玉県教育委員会教育長から「開発事業に係わる埋蔵文化財の範囲確認調査実施の協力について」という依頼文書が児玉町教育委員会教育長あてに提出された。この文書によれば埼玉県警察本部施設課による児玉警察署共和駐在所改築事業に先立ち、この区域に所在する『埼玉県遺跡地図』児玉町№54-021遺跡の範囲確認を実施し保全計画立案にかかる基礎資料を得るために協力を依頼するというものであった。

試掘調査は平成10年11月11日に埼玉県警本部施設課、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課及び児玉町教育委員会の三者立ち会いのもと実施された。

調査方法は開発予定地にトレンチを設定しバックホーにより表土を除去した後、精査して遺構・遺物の有無を確認するというものであった。確認面からは堅穴住居址の一部と思われる暗褐色土の落ち込みが確認され、遺跡の範囲が当該地に広がることが明らかとなった。同日、三者により保存の措置について協議が行われたが計画変更は困難であるとの結論に達した。この協議に基づき平成10年11月9日付けで埼玉県知事より施第419号「埋蔵文化財発掘の通知」が文化庁長官あてに提出された。

試掘調査の結果は平成10年11月16日付けの教文第993-1号において埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長から「埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて（回答）」として正式に埼玉県警本部施設課長あてに提出された。これを受け埼玉県警本部施設課、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課及び児玉町教育委員会の三者により再度協議・調整が行われた。この結果、駐在所本体部分は盛土保存する事とし、掘削が遺構面に及ぶ浄化槽部分について発掘調査を行い記録保存の措置をこうずることとなり、また児玉町教育委員会の指導のもと児玉町遺跡調査会により発掘調査が実施されることとなった。同日付け、児玉町遺跡調査調査会長より児遺調第12号「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、児教社第135号「埋蔵文化財発掘調査の届け出（進達）」が児玉町教育委員会教育長より県教育委員会をへて文化庁長官に提出された。

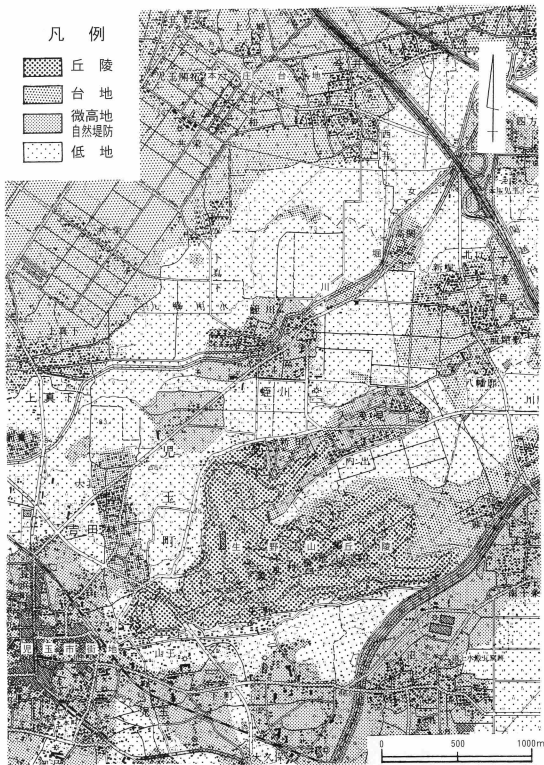
埼玉県警察本部施設課、児玉町教育委員会はさらに協議・調整を行い、平成10年11月24日、児玉町遺跡調査会長富丘文雄と埼玉県知事土屋義彦により児玉警察署共和駐在所建設用地内埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。

平成10年12月21日付けの教文第2-157号、「埋蔵文化財の発掘調査について」が県教育委員会教育長から児玉町教育委員会教育長あてに通知され発掘調査に至った。

(事務局)

凡 例

-  丘 陵
-  台 地
-  微高地
自然堤防
-  低 地



第2図 周辺の地形区分

「国土地理院 昭和60年発行 本庄」
1/25,000を使用

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

児玉町の位置 共和小学校校庭遺跡C地点遺跡の所在する児玉郡児玉町は埼玉県北西部に位置する。町の東側は美里町、西側は神川町・神泉村、南側は秩父郡長瀬町、北側は本庄市・上里町と接し児玉郡の中央部に位置している。

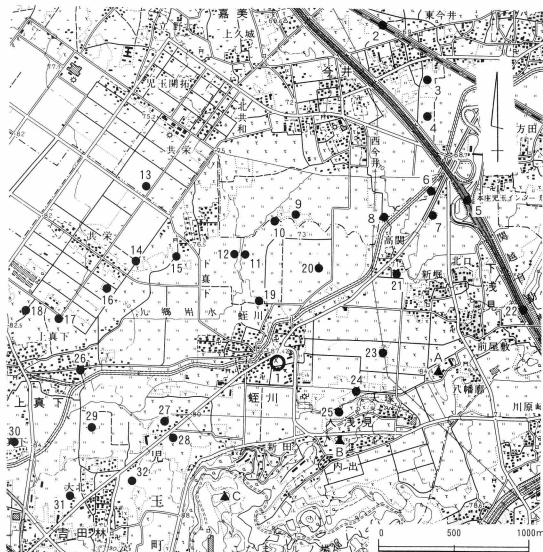
児玉地域の地形 この地域を巨視的に外観すると関東平野の北西縁辺部であり関東山地へと移行する境界域に相当し、利根川上流部右岸にあたる。平野部の南西から北東方向に展開する山地部は上武山地と呼称される。この上武山地は関東山地の一角を占める秩父連山より連なるものであり、埼玉・群馬両県にまたがっている。

平野部は丘陵、台地、低地により構成されている。丘陵は上武山地より北東へ半島状に張り出す児玉丘陵である。これに続く台地は上武山地からほぼ北東方向へと流下し、現在群馬県と埼玉県の県境となっている神流川によって形成された洪積扇状地であり、本庄台地と呼ばれている。この本庄台地の南東の縁辺部からさらに南東の東西方向に列点状に展開する生野山丘陵・浅見山丘陵等の第三紀の残丘に挟まれた地域は、上武山地にその源を発する女堀川によって開析され、南西から北東へと²のびる帯状の沖積低地となっている。この低地帯は圃場整備前には古代真岡式期以来の条里地割り（鈴木、1998a他）の景観を留めるものであり、現在においても児玉町の穀倉地帯の中心となっている。

町域は上武山地から本庄台地の一角及び沖積低地へ、北東から南西方向にかけ細長い楕円形を呈しており北西部の約半分の区域が山地部となっている。

町の面積は52.95km²で、市街地の中心であるJR八高線児玉駅の南西に位置する児玉町役場は東経139度07分57秒、北緯36度11分10秒、標高は98.5mを測る。遺跡はこの児玉市街地の北西約2km、また関越自動車道からは南西約1.6kmに位置している。この周辺は本庄台地と残丘の間に広がる沖積低地帯にあたり、この低地中には女堀川に併行するように微高地や自然堤防が点在している。市街地から本庄・児玉インターチェンジをへて本庄市に至る県道本庄鬼石線はこれらの微高地・自然堤防を縫うように走っている。

遺跡周辺の地形 遺跡はこれらの微高地の一つである蛭川地区に所在している。この微高地を概観すると北東方向に軸を持つ長軸約800m、短軸約500mを測る不正楕円形状を呈し、本庄・児玉インターチェンジの微高地に次ぐ規模のものである。ほぼ長軸に沿うように緩やかな勾配を持ち、南西端部と北東端部の比高差は約2.3mを測る。現況ではこの微高地と周囲の低地との比高差は明瞭ではないものの、前者が居住・畑作地に、後者が水田といった土地の利用形態の差異が見いだされる。遺跡はこの微高地の南東部分に占地している。



第3図 周辺の古墳時代の主要遺跡

「国土地理院 昭和60年発行 本庄」
1/25,000を使用

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
1	共和小学校校庭遺跡 (本報告)	13	古井戸遺跡 (1986, 井上他)	25	城の内遺跡 (1997, 恋河内)
2	今井源助遺跡 (1970, 柿沼・1992, 増田)	14	古井戸南遺跡 (1984年調査)	26	真下境東遺跡 (1989a, 鈴木)
3	地神・塔頭遺跡 (1998, 岩瀬)	15	平塚遺跡 (1994, 徳山他)	27	辻堂遺跡 (1996a・1996b, 恋河内)
4	今井条里遺跡 (1998, 岩田)	16	塚島遺跡 (1991, 鈴木他)	28	南側道遺跡 (1996b, 恋河内)
5	後張遺跡 (1982・1983, 立石他)	17	新宮遺跡 (1995, 恋河内)	29	鶴崎遺跡 (1995a, 恋河内)
6	川越田遺跡 (1985, 富田他・1993, 恋河内)	18	辻ノ内遺跡 (1991, 鈴木他)	30	金佐奈遺跡 (1997・1998a・b・1999, 徳山他)
7	梅沢遺跡 (1985, 富田他)	19	左口遺跡 (1994, 徳山他)	31	御林下遺跡 (1973, 駒宮・1998, 利根川)
8	今井川越田遺跡 (1995, 岩瀬・1996, 柿沼・1993, 豊瀬他)	20	柿島遺跡 (1995, 徳山他)	32	宮田遺跡 (1996b, 恋河内)
9	前田甲遺跡 (1992・1995, 増田)	21	東牧西分遺跡 (1995a, 恋河内)	A	鷺山古墳 (1984, 菅谷・1986, 坂本)
10	藤塚遺跡B地点 (1996a・1996b, 徳山他)	22	飯玉東遺跡 (1979, 駒宮他・1995a, 恋河内)	B	金嶺神社古墳 (1984, 菅谷・1988, 佐藤)
11	藤塚遺跡A地点 (1995, 徳山他)	23	浅見境北遺跡 (1997, 恋河内)	C	生野山鏡子塚古墳 (1984, 菅谷)
12	堀向遺跡 (1995, 徳山他)	24	日延遺跡 (1997・1998, 恋河内)		

2. 歴史的環境

弥生時代後期

児玉地域における弥生時代後期は吉ヶ谷式・樽式・「二軒屋式」といった複数の土器型式が認められる(坂本, 1984)。これら系統の異なる土器群が経時的先後関係に、あるいは共時的同時存在しているかは調査事例が少ないため明らかにされていない状況にある。しかし調査件数が少ないといった現象を積極的に評価するならば該期の集落は小規模かつ散在的であると言えよう。また集落の占地は丘陵部に偏在する傾向にある。該期の水田址あるいは水田耕作に使用されたと思われる道具類は現在のところ未検出である。水田耕作を生業の前提とするならば、集落の占地から近在する丘陵裾部を開析した小支谷等を利用した小規模な谷戸田経営が推定される。

古墳時代前・中期

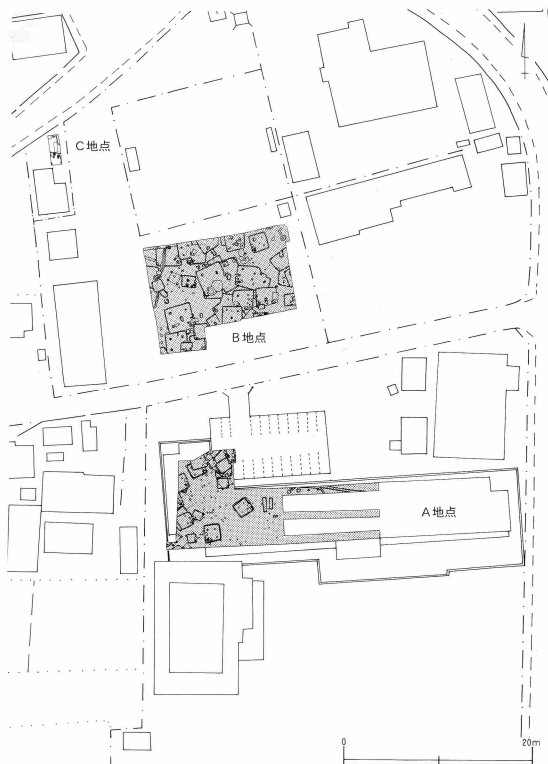
古墳時代前期から中期、五領(石田川)期及び和泉期になると集落の在り方は前代とは様相を異にする。丘陵部においては丘陵先端部付近に墓域としての方形周溝墓群、それに近接し丘陵奥側に集落が位置するといった傾向が認められている(恋河内, 1991)。沖積低地部においては微高地・自然堤防上を中心に展開している。該期の集落は後張遺跡といった中核となる大規模な集落の登場をみるもののその他の集落は概して小規模である。しかし和泉期は五領期と比較するとその規模はやや拡大し継続期間も長期化する傾向が認められる。また沖積低地部において灌漑のために開鑿されたと思われる溝址は五領期より増加し、和泉期には埋没河川を再掘削して灌漑用水として利用した“蛭川埋没河川跡”(鈴木, 1997他)も明らかとなり、低地部の積極的な開発を前提とした集落の移動が想起される。

古墳時代後期

古墳時代後期には金佐奈遺跡B地点・今井川越田遺跡・後張遺跡といった大規模かつ長期に継続する集落が形成される。特に鬼高Ⅱ式期には検出される竪穴住居址は重複の度合いを増し、その軒数も飛躍的に増加する。このような傾向は前代、和泉期までの集落が比較的短期間に廃絶されるものがあることから沖積低地内の灌漑系統の整備に伴う集落の移動が想起され、該期の一定地内における長期の定住は灌漑系統の一定の完成とそれに伴う耕作地及び居住区域の班給・分配あるいは占有が前提となろう。

白鳳・奈良時代

真間期の当該地域は、洪積台地面への進出に先立つより大規模な灌漑系統の整備と沖積低地への条里施工、および集落の移動という一連の開発から「計画的村落」としてその社会的背景とともに論考されてきた(鈴木, 1989・1991他)。低地部における該期の集落は金佐奈遺跡B地点・南街道遺跡・東牧西分遺跡・秋山大町東遺跡等があるものの小規模で縮小傾向を辿るものである。これらの低地帯中の小規模な集落は条里施工に関与したものと思われ、条里施工の進展および台地上の集落・耕作地の拡充に従い台地面へと移動するのであろう。



第4図 共和小学校校庭遺跡A・B・C地点位置図

「児玉町役場都市計画図No.6
平成4年測量」1/25,000に合成

第Ⅲ章 共和小学校校庭遺跡C地点の概要

1. 遺跡の概要

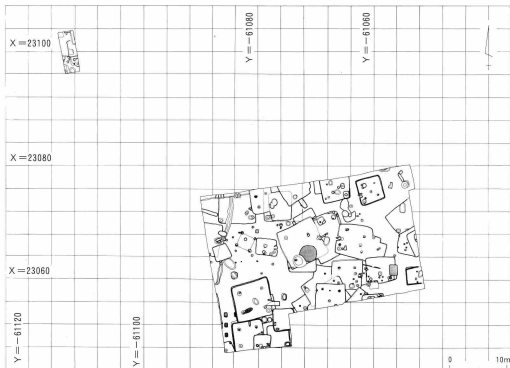
本遺跡は埼玉県児玉郡児玉町大字蛭河字耕地に所在し、『埼玉県遺跡地図』のNo.54-021の共和小学校校庭遺跡に該当している。すでに概要報告書が刊行されている同小学校校舎改築工事に伴う発掘調査地区をA地点（恋河内、1989）、同体育館建設にかかる調査地区をB地点（平成10年度調査、未報告）、そして本報告の調査地区をC地点と呼称する。

遺跡の立地

遺跡は本庄台地と生野山丘陵・浅見山丘陵等の残丘に挟まれ、南西から北東へと延びる低地帯の微高地上の南東部に占地している。標高は概ね75m前後を測る。範囲は南北約250m、東西約200mが予想されている。遺跡の時期は本調査及びB地点の調査において中世に比定される遺構も検出され、古墳時代後期及び中世の複合遺跡であるといえよう。

検出された遺構

検出された遺構は古墳時代後期、鬼高Ⅱ式期の竪穴住居址1軒、中世に比定される土壌1基、詳細な時期は不明であるが古代に遡る土壌1基である。竪穴住居址は調査区の関係からその一部の調査を行った。尚、本報告で使用している遺構番号はA・B地点からの通番である。



第5図 共和小学校校庭遺跡B・C地点

2. 基本土層

第6図は調査区北西コーナー部分において観察した基本層図である。第Ⅱ～Ⅴ層は浅間山系A軽石(As-A)を含む近世後期以降の耕作土であり、調査区北側では耕作がローム漸移層におよんでいる様子が観察される。第Ⅶ層以下には浅間山系B軽石(As-B)と思われるテフラが観察され、概ね中世以降の土層に対比できよう。漸移層下のロームはやや砂質をおび、また本地点最下層は礫層状を呈することから、これらの土層の形成には河川の氾濫等の影響があったものと推定される。

基本土層説明

- 第Ⅰ層 青灰色砂利層
第Ⅰ'層 褐色土
第Ⅱ層 褐色土

- 第Ⅲ層 暗褐色土

- 第Ⅳ層 暗灰褐色土

- 第Ⅴ層 暗褐色土

- 第Ⅵ層 暗灰褐色土

- 第Ⅶ層 暗褐色土

- 第Ⅷ層 暗黄灰色土

- 第Ⅸ層 黄褐色土

- 第Ⅹ層 黄褐色砂質土

- 第Ⅺ層 黄色砂質ローム層

- 第Ⅻ層 黄褐色土

(旧駐在所建設に伴う客土。)

(旧駐在所建設前の掘込。)

褐色土を主体とし、(As-A)を多量に、白色ブロック(～1.5cm)を中量、炭化物を少量含む。しまりは硬く、粘性は弱い。

暗褐色土を主体とし、上位に褐色土が中量斑状に混入する。(As-A)を多量、炭化物・焼土・小礫(～5mm)を少量含む。しまりはやや硬く、粘性は弱い。

暗灰褐色土を主体とし、(As-A)を中量、黄色砂質ローム粒子を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。

暗褐色土を主体とし、(As-A)を多量に、小礫(～5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。

暗灰褐色土を主体とし、黄色砂質ローム土が微量混入する。(As-A)を中量、黄色砂質ローム粒子(～2mm)を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。

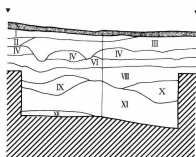
暗褐色土を主体とし、(As-A)、As系テフラ(As-B)を少量、黄色砂質ローム粒子(～3mm)・焼土粒子を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。

ローム漸移層。黄色砂質ロームがブロック状に含まれる。白色粒子・小礫(～8mm)を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや強い。黄色砂質ロームがブロック状をなし暗黄灰色土が隙間を充填する層。しまりはやや硬く、粘性は弱い。

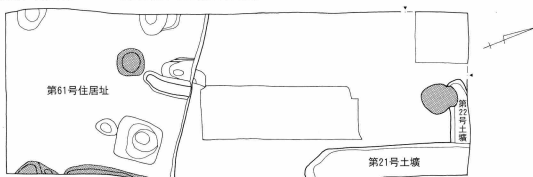
第Ⅺ層より粗い暗黄灰色土が混入。しまりは軟らかくバサバサとしている。粘性無し。

しまりはやや硬く、粘性は弱い。

黄色砂質ロームの混じった礫層。



第6図 基本土層図



第7図 共和小学校校庭遺跡C地点全測図

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居址

第61号住居止（第8・9図 図版4-1）

本址は調査区中央から南側に検出された。北側の壁と住居址内部の一部が検出され、南・東・西壁等は調査区外であるため規模は不明である。

検出された部分の規模は南北約3 m20cm、東西約2 m70cm、北壁での深さ約24cmを測り。カマドを有する北壁に直行させ主軸方位を求めるとN-27°-Eを示す。プランは北壁が直線上に調査区外に延びることから方形または長方形を呈するものと想定される。

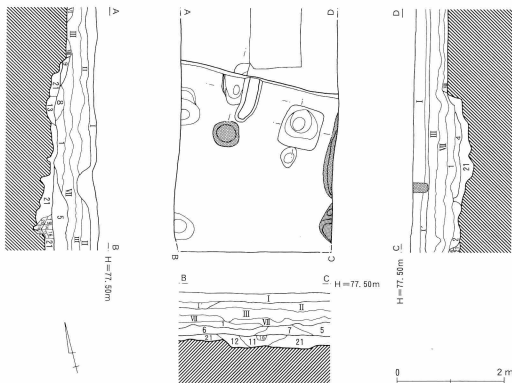
重複関係は住居址北側、カマド全面に位置するピットの掘削が床面に及んでいる。ピットの覆土は第21土層の覆土の主体をなす黒褐色土に対応する。

住居址の覆土は第1・2・4・8層のように覆土上層から床面下におよぶ土層が観察される。この土層にはAs-Bと思われるテフラ・砂粒・炭化物粒子・焼土粒子等の混入物が均質に含まれ、耕作による攪拌・均質化が推定されるものである。これらの土層は住居址北壁側に遍在する傾向をみせる。また南壁では住居址中央部に堆積する第7層上に第5・6層が堆積していることが観察された。上記のことから住居の埋没は南側から進行し、北壁側はやや窪状に下がった状態のまま耕作地として利用されたことが想起される。遺存する床面直上には焼土・炭化材小片及び粒子が観察され焼失家屋の可能性が考えられる。

壁は遺存状態の良好な調査区東側の壁においては下位は垂直に近い角度をなし、上位にいたりやや角度を持って立ち上がる。壁中央のやや西寄りにカマドが構築されている。カマドの東側から貯蔵穴が検出されている。

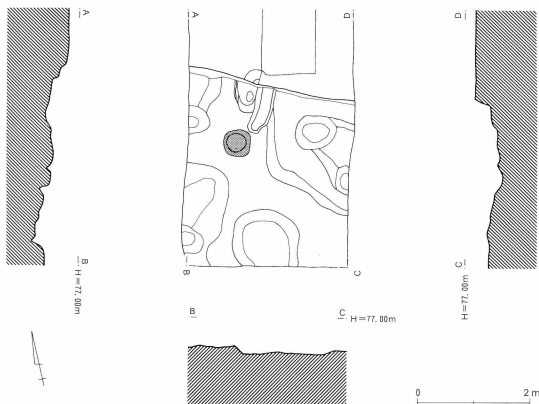
床面は黄色砂質ロームブロックを多量、同ローム粒子中量含む暗褐色土を主体として貼り床が施されている。比較的硬く踏み固められ、わずかな起伏を有するものの平坦であるが、北壁側がやや高い傾向が認められた。

掘り方は不規則的でカマド西、及び東側の貯蔵穴付近、そして調査区南西コーナー付近が不正形の土塊状に掘り込まれ、その底面は起伏が激しい状態を留めていた。このため掘削後短期間の内に貼り床土により被覆されたものと推定される。これらの掘り方とは別に住居中央部には径94cm～1 m4 cmを測る不正円形の落ち込みが確認された。この落ち込みの覆土は暗褐色土を主体とした土層（第12層）と貼り床土より大きな黄色砂質ローム土（第11層）であった。底面から立ち上がり付近には黄色砂質粘土が部分的に貼り込まれたような状態であった。これらの土層の上面には硬化した床面が認められ、人為的に埋め戻されたものである。ここでは床下土層としての性格を与えておきたい。



第61号住居址土層說明

- | | | |
|------|-------|--|
| 第1層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、暗褐色土を少量、黄色砂質ローム土をブロック状（～4cm）に含む。A s系テフラ（As-B）を少量、焼土粒を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。 |
| 第2層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を少量、ローム土を斑状に含む。焼土粒・炭化物を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。 |
| 第3層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第4層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、暗黄褐色土を斑状に含む。A s系テフラを中量、炭化物・焼土ブロック（～2cm程度）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。 |
| 第5層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム土をブロック状（～2cm）に少量含む。白色粒子を少量、焼土粒・炭化物を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第6層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を少量、ロームブロック（～3.5cm）を少量、A s系テフラを少量、炭化物を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第7層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を中量、ロームブロック（0.7～5cm）を少量、A s系テフラを少量、焼土粒を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第8層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム土を粒子状に少量含む。A s系テフラを少量、焼土を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第9層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム土を斑状に、ローム土（～5mm）を少量含む。白色粒子を少量、炭化物・小礫（～6mm）を微量含む。しまりはやや硬く、粘性は弱い。 |
| 第10層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を少量、焼土粒を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は強い。 |
| 第11層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ロームブロック（～8mm）を多量に、ローム土を中量、黄色粘土塊（2cm）を微量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや弱い。貼床。 |
| 第12層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや弱い。 |
| 第13層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ロームブロック（～2cm）を少量、ローム土を斑状に、白色粒子を微量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや弱い。 |
| 第14層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第15層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黄色砂質ロームブロック（～1.0cm）・ローム粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第16層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を少量含む。しまりはやや硬く、粘性は弱い。 |
| 第17層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、暗褐色土をブロック状に、黄色砂質ローム粒子を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。 |
| 第18層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや弱い。 |
| 第19層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を少量含む。しまりはやや硬く、粘性は弱い。 |
| 第20層 | 暗黄褐色土 | 暗黄褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。 |
| 第21層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黄色砂質ロームブロック（～5cm）を多量に、ローム土を斑状に含む。白色粒子・炭化物・焼土粒子を微量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや弱い。貼床。 |



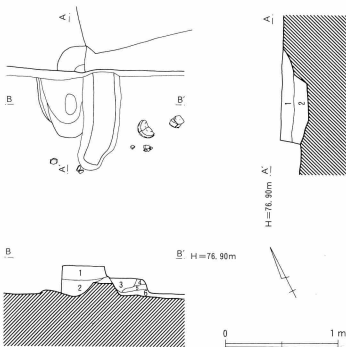
第9図 第61号住居址掘方平面図・エレベーション図

カマド（第10図 図版3-1）

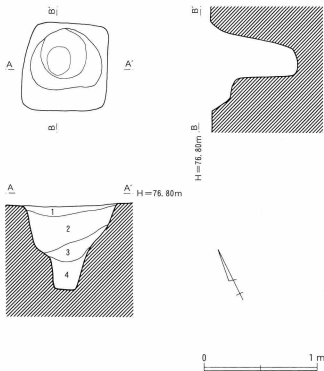
上面の土層観察により当初予想していたプランは切開後住居東側にずれていたことが判明した。比較的良好に遺存しているものと思われ、右袖と予想された黄色砂質ローム部（第3層）はカマド壁体が東側にブロック状に倒壊したものであり、この西側よりカマド基部である黄色砂質ロームの掘り残し部分が確認された。左袖は耕作をうけ遺存しなかった。焚き口部は床面と同レベルであり燃焼部は長軸47cm、奥壁部最大幅37cm、深さ4cmを測る。奥壁部はやや角度を持って立ち上がり煙道部は緩やかに立ち上がる。遺存する右袖基部は長さ76cm、最大幅31cmを測る。支脚は検出されなかった。

貯蔵穴（第11図 図版3-2）

住居址カマド東側で検出された。上面プランは東西辺が住居壁に併行する隅丸台形を呈する。北壁寄りに一段下がる円形状の落ち込みがあり壁中位は緩やかなテラス状を呈する。底面は平坦であり壁下位および上位はやや角度をもって立ち上がる。規模は北辺55cm、南辺62cm、東西辺約65cm、深さ67cmを測る。この貯蔵穴内からは遺物は検出されなかった。



第10図 第61号住居址カマド平面図・セクション図



第11図 第61号住居址貯蔵穴平面・セクション・エレベーション図

第61号住居址カマド土層説明

第1層 暗褐色土

暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム小塊（～3cm）を少量、黄色砂質ローム粒子（～5mm）・焼土粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。

第2層 暗黄褐色土

暗褐色土を主体とするが黄色砂質ローム粒子（～0.1mm）を中量含む。黄色砂質ローム小塊（～1cm）・焼土粒子（～1cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。

第3層 黄色砂質ローム

カマド袖崩壊土。

第4層 暗黄褐色土

第7層に近似する黄色砂質ロームブロック。

第5層 暗黄褐色土

黄色砂質ローム粒子（～1mm）を少量、黄色砂質ロームブロック（1～1.5cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。

第6層 暗褐色土

砂質ロームブロック（1～1.5cm）を少量、同ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は非常に弱い。

第7層 暗黄褐色土

黄色砂質ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。

貯蔵穴土層説明

第1層 暗褐色土

暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム粒子・焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は非常に弱い。

第2層 暗褐色土

暗褐色土を主体とし、黄色砂質ローム小塊（～5cm・風化粒子状）・同粒子（～2mm）を少量、焼土粒（～2mm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。

第3層 暗褐色土

第2層に準ずるが、焼土粒子を含まない。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。

第4層 明褐色土

黄色砂質ロームを主とし、暗褐色土粒子（～0.1mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。

2. 出土状態と遺物観察 (第12・13図 図版2-1・2・6・7)

本遺跡の出土遺物は、主として第61号住居址及び、住居址覆土の上層耕作土からの出土であり、全て鬼高Ⅱ式期に該当するものであると思われる。また、本遺跡に隣接する平成十年度調査の共和小学校校庭遺跡B地点での主体的な出土遺物の年代とも概ね対応する。

遺物の出土状態

遺物の出土状態は、土層の断面観察から、後世の耕作が部分的に第61号住居址の床面に達している状況が確認でき、遺物の層位に限定されない散漫な分布を示していた。第13図4・5・6の遺物は上層耕作土との接合関係が認められ、住居廃絶後の経時的な耕作によって破碎され生じた土器片が層中に拡散してゆく状況を確認することができる。第13図2はカマド付近からの出土であり、遺物の遺存状態も良好であることから、原位置に近い状態を保っていたと思われる。

第61号住居址はカマドを有する壁面付近を中心に部分的に検出されたのみであり、また、継続的な耕作による攪乱の影響を受けていることから、破片資料を併せても遺物の総量は少ない。

遺物の観察

遺物観察は器種・法量及び残存率・形態及び成形手法の特徴・調整手法の特徴・色調及び焼成・胎土の順に記述した。このうち口径については口端外部での計測である。また、成形手法・調整手法の特徴において実測図から明瞭に読み取れるものに関しては極力省略した。なお、残存率は完形からの比率であり、胎土中の混入物質については、肉眼で観察し得るものを記述した。

図化し得た遺物は、以下に記述した坏3点、小形甕・小形壺・手づくね土器がそれぞれ1点ずつの計6点である。

第13図1は坏形土器である。法量は推定口径16.6cm、残存高6.0cm、残存率60%を測る。器形は口端部に面を有し、口唇部が僅かに外反する。また、口端部は調整工具の端部の痕跡が条線状に巡り、口辺部は内側中位に緩い凹面を有し、口辺部と底部との境界は僅かに窪み沈線状を呈する。器面調整は、口端部は工具を用いたヨコナデ、口辺部内外面及び底部内面上半は、一連の工具を用いたヨコナデ、底部外面はヘラケズリである。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土はきめ細かく、鉄斑粒・石英・白色粒子が微量観察される。なお、二次焼成をともなっているものと思われ、器表面の剥落が顕著である。

第13図2・3は坏形土器である。形態・胎土共に近似しているため、一括して記述する。法量は図2が、推定口径14.3cm、器高5.0cm、残存率90%、図3が推定口径13.4cm、残存高3.8cm、残存率40%を測る。器形は、口端部は内側に面を成し、口唇部は外側がやや凹み、口辺部は内側中位に緩い凹面を有する。また、口辺部と底部の境界は若干窪み沈線状を呈する。器面調整は、口端部は、

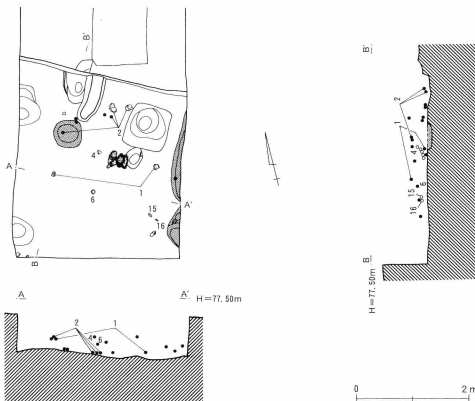
工具を用いたヨコナデ、口辺部内外面及び底部内面上半は、内外一連の工具ヨコナデ、底部外面はヘラケズリである。色調は内外面ともに淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土はきめ細かく、夾雑物・混和材には普遍的に鉄斑粒・絹雲母・黒色粒子・白色粒子が観察される。

第13図4は小形甕形土器である。法量は推定口径13.4cm、残存高10.1cm、残存率30%を測る。器形は、口端部は1mmほど面を成し、口唇部はやや外反し、口縁部が直立気味に立ち上がる。また、胴部は寸胴に近いがわずかに張りをも有する。なお、底部は欠損しており形状を確認し得ない。器面調整は、口縁部は内外面一連の工具ヨコナデ、胴部外面は、ヘラケズリ調整、胴部内面は工具による横位のナデ調整であり、両者ともに口縁部調整に切られている。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は普通である。胎土中の夾雑物・混和材には鉄斑粒・白色粒子・絹雲母を中量、角閃石を少量、片岩粒が微量観察される。なお、外面胴部下位に被熱による変色が認められる。

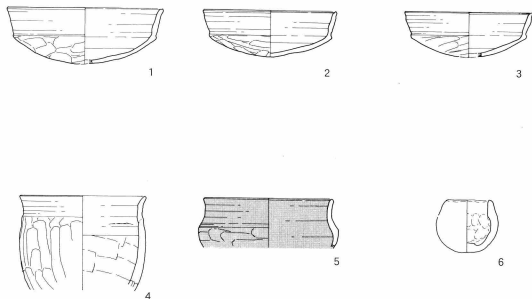
第13図5は小形垂形土器である。法量は推定口径13.8cm、残存高5.3cm、残存率は30%を測る。器形は、口端部は工具端面を使用した押し引きにより内側に浅く沈線が巡り、口縁部は直立気味に外反する。底部は欠損しており、全体の形状を確認し得ないが、肩部の遺存状況から、肩部に張りをも有する偏平な形態であることが推定される。器面調整は、口縁部は内外面ともに工具を用いた一連のヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ調整、胴部内面は口縁部の工具ヨコナデが及んでいる。色調は内外面ともに暗黒褐色から暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。器内外面には黒色処理が施されている可能性を指摘しておく。胎土はきめ細かく、夾雑物・混和材には鉄斑粒・白色粒子・黒色粒子が微量観察される。

第13図6は所謂手づくね土器である。法量は、器高5.6cm、残存率70%を測る。口縁部は欠損が著しく口径は計測できない。器形は、口端部はやや尖り気味であり、底部が丸底である。器面調整は外面は丁寧なナデ調整、内面は指頭による押圧及びナデである。色調は外内ともに暗褐色を呈し、焼成は普通である。胎土中の夾雑物・混和材には白色粒子を中量、絹雲母・鉄斑粒を少量、黒色粒子が微量観察される。

その他の遺物として、長胴甕の口縁部、高坏脚部の破片資料等を若干量出土している。これらは、形態を表現し得る遺存状態を示しておらず、また、接合率も悪かったので図化し得なかったが、他の住居出土遺物と時期的に齟齬をきたすものではなかった。また、貯蔵穴南側で径16~24cmの5個の礫石が床面直よりやや浮いた状態で検出されている。(桜井 和哉)



第12図 第61号住居址遺物出土状況図



第13図 第61号住居址出土遺物

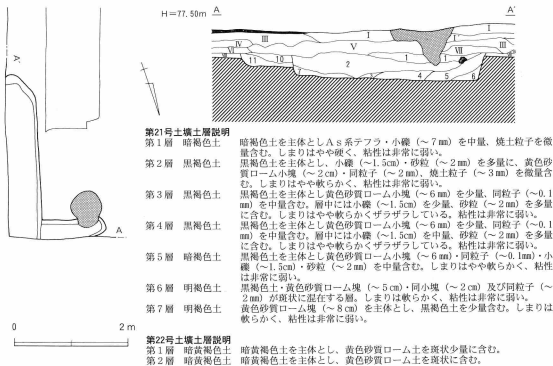
3. 土 壌

第21号土壌 (第14図左側 図版4-2)

調査区東コーナー部から東壁にかかり検出した。第22号土壌を切って掘削されている。規模は長軸2m62cm、幅54cm、深さ42cmを測る。プランは西側の立ち上がり上端は直線的に調査区東壁に並行し、南側で緩く斜行してさらに小さく弧を描き東壁外へと延びている。底面は平坦であるが南側が比高差約6cmとやや深い。壁は垂直に近い角度で直線的に立ち上がる。遺物は検出されなかった。覆土は黒褐色土を主体となすものである。この土層は第61号住居址の覆土には認められず、町内の古墳址周溝覆土上層に見られ、しばしば浅間山系B軽石(A s-B、天仁元年・1108年噴出)に被覆されている黒褐色土(黒色土)に類似するものである。本址土層の第1～5層中には砂粒が含まれ、肉眼観察によるB軽石の識別は困難であったが主体土から概ね中世初頭以降に相当するものと思われる。

第22号土壌 (第14図右側 図版4-2)

調査区北壁にかかり検出した。東側が第21号土壌に切られ、一部は電柱牽引用のアンカー埋設により破壊されている。規模は長軸2m5cm、幅30cm、深さ22cmを測る。プランは不正楕円形状を呈する。遺物は検出されなかった。重複関係と覆土は第21号土壌に先行するが詳細な時期は不明である。



第14図 第21・22号土壌

第V章 出土炭化材樹種同定

共和小学校校庭遺跡から出土した炭化材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

共和小学校校庭遺跡では、6世紀後半（古墳時代鬼高期）の遺構が検出されている。このうち、C地点61号住居跡は、焼失家屋と考えられ、床面などから住居構築材に由来すると考えられる炭化材が出土している。

本報告では、61号住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、C地点61号住居跡から出土した炭化材3点（試料番号15, 16, 床面炭化材）である。

2. 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は全て落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

粟孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列し、年輪界付近ではかなり小径になる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

表1 樹種同定結果

地 点	遺 構 名	試 料 名	用 途	樹 種
C地点	61号住居跡	No.15	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		No.16	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		床面炭化材	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

4. 考 察

住居構築材と考えられる炭化材は、全てクヌギ節であった。埼玉県では、これまでもいくつかの遺跡で古墳時代の住居構築材について樹種同定が行われている（山内, 1985; バリノ・サーヴェイ株式会社, 1984, 1993, 1997; 鈴木・能城, 1994）。その結果を見ると、時期や地域に関わらずコ

ナラ亜属（クヌギ節・コナラ節）の木材が多い。とくに、深谷市清水上遺跡では、柱穴から出土した柱根もクヌギ節であった。このことから、古墳時代には、埼玉県内の広い地域でコナラ亜属が住居構築材の主要な部材に多く利用されていたことが推定され、今回の結果もその一例といえる。

住居構築材の用材選択は、周辺植生を反映すると考えられている（高橋・植木，1994）。このことを考慮すれば、本遺跡周辺にはクヌギ節・コナラ節を主とする二次林（いわゆる雑木林）が見られ、そこから木材を得ていた可能性がある。

ところで、深谷市清水上遺跡では、竪穴住居跡の柱根と共に掘立柱建物の柱材についても樹種同定が行われているが、その結果は針葉樹のモミ属であった。竪穴住居と掘立柱建物とで用材選択に異なる傾向は、弥生時代の静岡地域などで確認されており、加工法や強度による選択の違いが指摘されている（能城ほか，1991）。また、建物の構造・規模等の違い等も用材選択が異なる背景に考えられる。清水上遺跡の結果を見る限り、本地域の古墳時代でも竪穴住居と掘立柱建物とで用材選択が異なっていた可能性がある。今後さらに多くの資料を蓄積し、詳細を明らかにしたい。

引用文献

- 能城修一・車崎正彦（1991）「静岡県沼津市雌鹿塚遺跡出土木製品の用材」『金沢大学教養部論集・人文科学編』28（2），p.43-63
- バリノ・サーヴェイ（1984）「古墳時代の樹種鑑定」『尾ヶ崎遺跡－縄文・古墳時代集落跡の調査－』株式会社 p.159-162，埼玉県庄和町・尾ヶ崎遺跡調査会
- バリノ・サーヴェイ（1993）「中耕遺跡出土遺物の自然科学分析報告」『坂戸市 中耕遺跡住宅・都市整備公団飯戸入西地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告－VI－』p.320-365，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
- バリノ・サーヴェイ（1997）「羽折遺跡Aにおける自然科学分析」『羽折遺跡A 1次・2次・3次調査発掘調査報告書』，p.58-67，埼玉県鶴ヶ島市教育委員会 株式会社
- 鈴木三男・能城修一（1994）「埼玉県深谷市清水上遺跡出土木材の樹種」『深谷市 清水上遺跡 一般国道17号線 上部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告－IV－』p.184-185，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
- 高橋 敦・植木真吾（1994）「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYNO』2，p.2-18，バリノ・サーヴェイ株式会社
- 山内 文（1985）「三番耕地遺跡の炭化材」『三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告－III－』，p.51-52，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集

第Ⅵ章 まとめ

本報告の共和小学校校庭遺跡は、A地点は概要報告が為されているもののB地点は未整理であり集落内部の分析・検討を行える状況ではない。そこで今回は古墳時代における近隣遺跡の推移を概観し現時点での共和小学校校庭遺跡の概説を行い、まとめとしたい。

児玉地域の弥生時代後期から真間期までの集落の変遷の概観は既に触れた(第Ⅱ章 2 歴史的環境)。弥生時代後期においては主に丘陵(残丘)上が居住の場であり、眼下に広がる沖積低地への進出には至らない状況であった。

古墳時代前期から中期にかけては後張遺跡(1982・1983、立石他)のような中核と言える集落の登場をみるものの、その他の遺跡は沖積低地中の狭隘とも言える微高地・自然堤防上に小規模に展開している。このような集落の低地部への進出は耕地の獲得を前提としていることは言うまでもない。該期には堀向・藤塚(1995、徳山他)・川越田(1993、恋河内)・今井川越田(1995、磯崎・1996、伴瀬・1998、岩瀬)遺跡における埋没河川を利用した“蛭川埋没河川址”、本庄市一丁田遺跡(1985、富田他)等で灌漑のために開鑿されものと推定される溝址が検出されている。また本庄台地および近接する微高地上においても塚畠遺跡(1991、鈴木)・古井戸遺跡(1986、井上他)といった集落は存在するものの小規模でありその存続期間も短期といえ台地上への本格的な進出は真間期を待たなければならない。

古墳時代後期にいたるとミカド遺跡(1981、鈴木)・金佐奈遺跡(1997・1998a・1998b・1999、徳山他)・今井川越田遺跡・後張遺跡といった大規模かつ長期に継続する集落が現れる。本報告の共和小学校校庭遺跡は古墳時代においては一部和泉期に比定される遺構を含む(註)もののその大半は鬼高期の遺構に占められている。本遺跡は現状では集落の全容は把握し得ないが、上記の周辺集落の占地の変遷と灌漑系統の整備、該期の他の集落の動態、A・B地点(第4図)における竪穴住居址の重複関係、また遺跡の占地する微高地の規模といった地理的条件を加味すれば、その規模はともあれ低地における灌漑系統の一定の完成からなる長期継続形の集落が予想される。また今回の調査により該期集落の範囲の一端が明らかとなり、より広範な集落の広がりが予想される。

今後の調査に期待したい。

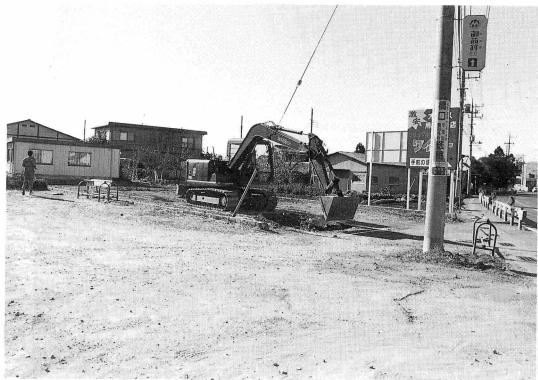
(大熊季広)

(註) B地点では柱穴内に和泉期の土器が埋設された掘立柱建物址が検出されている。

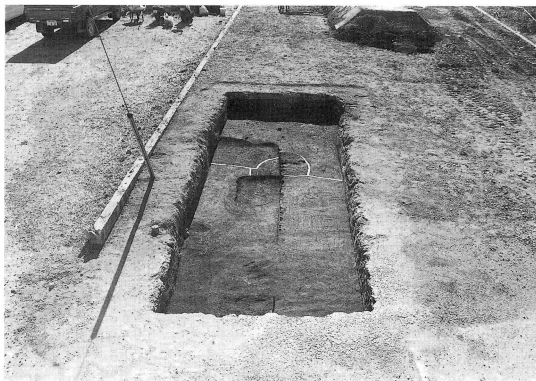
参考文献

- 磯崎 一他 (1995) 『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第177集
- 井上尚明他 (1986) 『将監塚・古井戸・古墳・歴史時代Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集
- 岩瀬 譲 (1998) 『地神・塔頭』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第193集
- 岩田 明広 (1998) 『今井桑里遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第192集
- 大屋 道則 (1995) 『5 土器』 『城北遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第150集
- 小沢 正人 (1969) 『児玉町金屋地池遺跡』 『埼玉考古』 第7号
- 小澤 国平 (1996) 『古墳時代後期から平安時代の集落の変遷』 『大久保山遺跡Ⅳ』 早稲田大学本庄校地文化財調査室編
- 柿沼 幹夫 (1970) 『下田・諏訪』 埼玉県道路発掘調査報告書 第21集
- 柿沼幹夫他 (1985) 『神川村前羽根根遺跡の研究』 『紀要 12』 埼玉県立博物館
- 金子 彰男 (1995) 『真下境西・反町・八荒神北・八荒神南遺跡』 神川町教育委員会文化財調査報告 第12集
- 金子 彰男 (1997) 『青柳古墳群・城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群』 神川町教育委員会文化財調査報告 第16集
- 恋河内昭彦 (1989) 『共和小学校庭遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第10集
- 恋河内昭彦 (1990) 『児玉地方の古ヶ谷式土器について』 『塩谷下大塚遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第14集
- 恋河内昭彦 (1991) 『真鏡寺後遺跡Ⅲ』 児玉町文化財調査報告書 第14集
- 恋河内昭彦 (1993) 『川越田遺跡Ⅱ』 児玉町道路調査報告書 第5集
- 恋河内昭彦 (1995a) 『飯玉東Ⅱ・高畑田・越越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財調査報告書 第17集
- 恋河内昭彦 (1995b) 『南共和・新宮遺跡』 児玉町道路調査報告書 第6・7集
- 恋河内昭彦 (1996a) 『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書 第19集
- 恋河内昭彦 (1996b) 『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第20集
- 恋河内昭彦 (1997) 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第23集
- 恋河内昭彦 (1998) 『日延遺跡出土の古墳時代前期の土器』 『日延Ⅱ・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第31集
- 恋河内昭彦 (1999) 『雷電下・南ノ前遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第32集
- 駒宮 史朗 (1973) 『枇杷橋遺跡』 埼玉県遺跡調査報告書 第20集
- 駒宮 史朗 (1977) 『御林下遺跡』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第13集
- 駒宮史朗他 (1979) 『雷電下・飯玉東』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第22集
- 坂本和俊他 (1981) 『金屋遺跡群』 児玉町文化財調査報告書 第2集
- 坂本和俊他 (1984) 『埼玉県』 『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
- 坂本 俊他 (1986) 『児玉町鷺山古墳』 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 佐藤 好司 (1986) 『金鐘神社古墳』 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 篠崎 薫 (1992) 『宮棚原・榎下遺跡Ⅳ』 宮棚原・榎下遺跡調査会
- 菅谷 浩之 (1984) 『北武蔵における古式古墳の成立』 児玉町町史資料調査報告 古代第1集
- 鈴木 徳雄 (1983) 『古代北武蔵における土師器制作技法の画期』 『土曜考古』 第7号 土曜考古学研究会
- 鈴木 徳雄 (1984a) 『いわゆる北武蔵系土師器形の動態』 『土曜考古』 第9号 土曜考古学研究会
- 鈴木 徳雄 (1984b) 『古代児玉郡における土地利用と村落の変遷』 『阿知越遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書 第4集
- 鈴木 徳雄 (1989a) 『古代児玉郡の開拓と真下大溝』 『真下境東遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第9集
- 鈴木 徳雄 (1989b) 『九郷用水の開鑿年代』 『九郷用水関係資料集』 児玉町史資料調査報告書 第12集
- 鈴木 徳雄 (1991) 『古代児玉郡における集落設営の計画性』 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第15集
- 鈴木 徳雄 (1996a) 『金屋桑里周辺の灌漑と開発』 『東庭沼・藤塚Ⅰ・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第21集
- 鈴木 徳雄 (1996b) 『古代北武蔵の開拓と集落』 『月刊文化財』 11月号 №398
- 鈴木 徳雄 (1997a) 『古代児玉郡の灌漑と地域圏』 『金佐奈Ⅰ・児玉桑里上田地区』 児玉町文化財調査報告書 第25集
- 鈴木 徳雄 (1997b) 『古代北武蔵の土地利用と集落』 『日本歴史』 9月号第592号
- 鈴木 徳雄 (1998a) 『児玉桑里の形成と継続』 『児玉桑里遺跡-児玉北部地区-』 児玉町文化財調査報告書 第28集
- 鈴木 徳雄 (1998b) 『古代北武蔵における灌漑と土地利用』 『治水・利水道路を考える』 第7回 東日本埋蔵文化財研究会
- 瀧瀬芳之他 (1998) 『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第193集
- 立石盛河他 (1982) 『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 立石盛河他 (1983) 『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 徳山寿樹他 (1994) 『平塚・左口・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第16集
- 徳山寿樹他 (1995) 『堀向・藤塚・柿島・内手・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第18集
- 徳山寿樹他 (1996a) 『東庭沼・藤塚Ⅰ・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第21集
- 徳山寿樹他 (1996b) 『藤塚遺跡-B2地点の調査』 児玉町文化財調査報告書 第22集
- 徳山寿樹他 (1997) 『金佐奈遺跡-A1地点の調査』 児玉町文化財調査報告書 第24集
- 徳山寿樹他 (1998a) 『金佐奈遺跡-A2地点の調査』 児玉町文化財調査報告書 第29集
- 徳山 寿樹 (1998b) 『金佐奈遺跡Ⅰ-B地点の調査』 児玉町文化財調査報告書 第30集
- 徳山 寿樹 (1999) 『金佐奈遺跡Ⅱ-B地点の調査』 児玉町文化財調査報告書 第33集
- 根根川彦彦 (1998) 『御林下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第223集
- 富田和夫他 (1985) 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第150集
- 坪瀬宗一他 (1996) 『今井川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第178集
- 増田 一裕 (1990) 『山根遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第18集
- 増田 一裕 (1992) 『女堀川桑里今井地区前田甲遺跡発掘調査報告書-遺構篇-』 本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第2分冊
- 増田 一裕 (1992) 『今井諏訪遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第21集
- 増田 一裕 (1995) 『女堀川桑里今井地区前田甲遺跡発掘調査報告書-遺物篇-』 本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第1分冊
- 児玉町教育委員会 児玉町史編さん委員会 (1993) 『児玉町史 自然編』

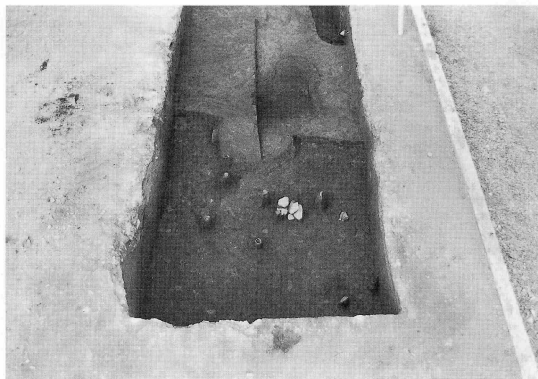
図 版



1. 範囲確認調査風景（北東より）



2. 遺構確認状況（北より）



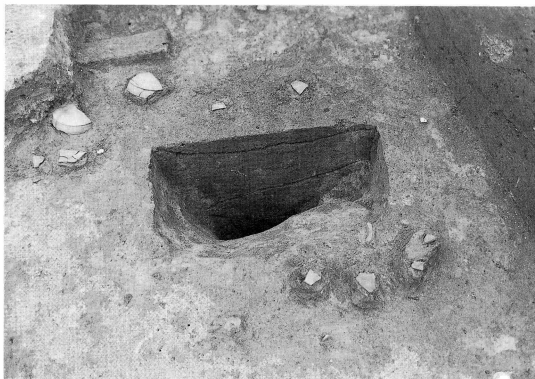
1. 第61号住居址遺物出土状況（南より）



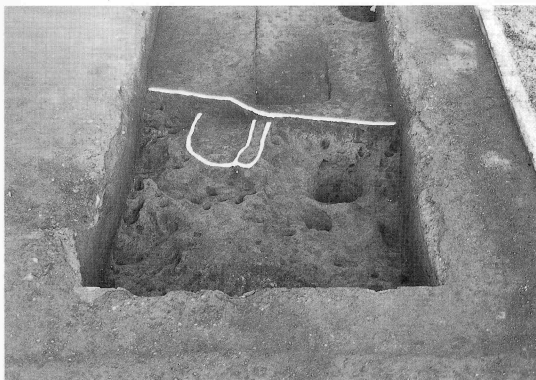
2. 第61号住居址遺物出土状況近接（東より）



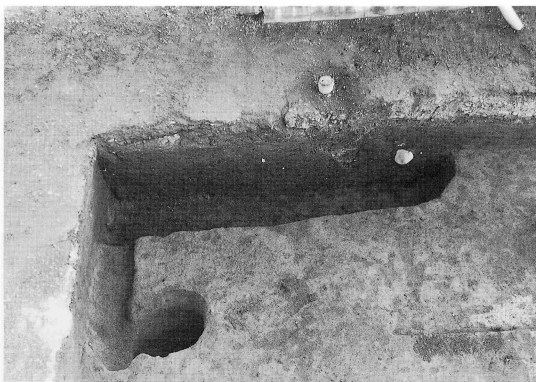
1. 第61号住居址カマド（南より）



2. 第61号住居址貯蔵穴（南より）



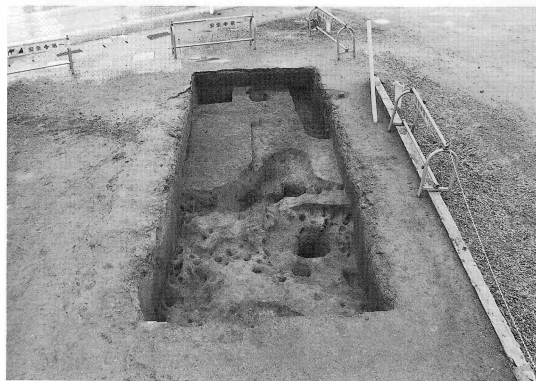
1. 第61号住居址掘方（南より）



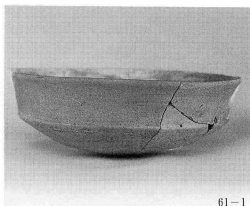
2. 第21・22号土壙（西より）



1. 調査風景（南東より）



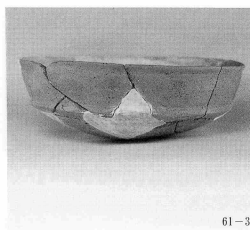
2. 調査区全景（南より）



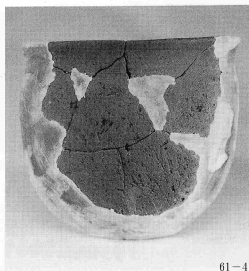
61-1



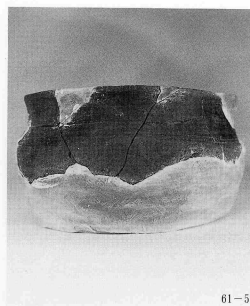
61-2



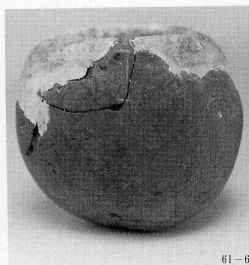
61-3



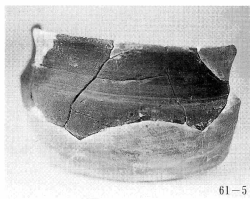
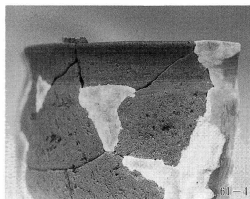
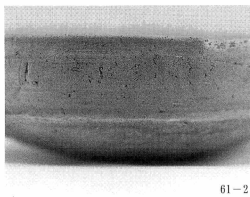
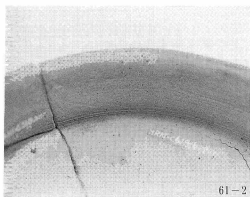
61-4



61-5

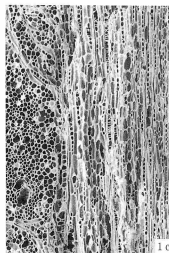
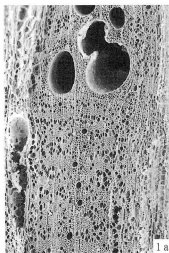


61-6



第61号住居址出土遺物近接

図版 8 炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クスギ節 (C地点61住 床面炭化材)

a : 木口, b : 柃目, c : 板目

200μm: a
200μm: b, c

報告書抄録

フリガナ		キョウワショウガッコウコウテイイセキシイチテン							
書 名		共和小学校校庭遺跡C地点							
副 書 名							巻 次		
シ リ ーズ		児玉町遺跡調査会報告書					巻 次	第 8 集	
編 集 者		大 熊 季 広・櫻 井 和 哉							
編 集 機 関		児玉町遺跡調査会							
所 在 地		〒367-0298 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地 TEL0495 (72) 1331							
発 行 日		2000 (平成12) 年 3 月15日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡						
共和小学校校庭遺跡C地点	児玉郡児玉町大字蛭川字耕地915番地の6	113824	021	36°12'21"	139°09'13"	19981125 } 19981207	18.25 ㎡	共和駐在所改築	
所収遺跡	種別	主な年代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項		
共和小学校校庭遺跡C地点	集落	古墳時代後期	竪穴住居址 1		土器・礫石・炭化材		集落の範囲の一端明らかになった		
		中世	土壇 1						
		古代	土壇 1				詳細な時期不明		

児玉町遺跡調査会報告書第8集

共和小学校校庭遺跡

－ C地点の調査－

平成12年3月10日印刷

平成12年3月15日発行

発行者 児玉町遺跡調査会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356番地